

末廣 昭

日本／経済学、地域研究 (タイ) *SUEHIRO Akira*

私のアジア経済論40年

キャッチアップ型工業化論からデジタル経済論へ

■ 開催日／2018年9月22日(土) 11:00~13:00 ■ 参加者／150人
■ 会場／福岡市科学館6階 サイエンスホール

第1部 基調講演

タイを越えたアジア全体に視野を広げ 4つの段階でアジア経済論を展開



私は大学入学前からアジア研究をやりたいと思っていて、1972年にタイで起こった日本商品不買運動などをきっかけに、タイを研究テーマにしようと考えました。ですが、1997年のアジア通貨危機がターニングポイントとなり、タイだけを見ていたらアジアのことが分からないと痛感して、以後積極的にアジアの問題に視野を広げるようになりました。私のアジア経済論は、ドイツ

のインダストリー論にならい、1.0から4.0の4つの段階に分けて展開しています。

まず、「アジア経済論1.0」は、人口爆発の問題から入ります。人口が増加することにより、経済成長が低くなり、アジアは低開発であるとされてきました。

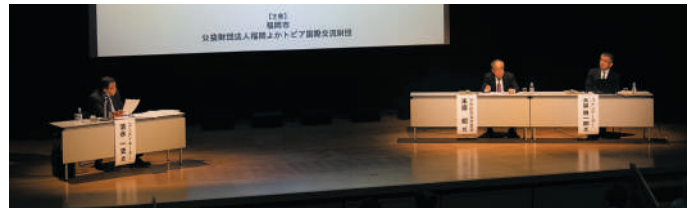
次に、私が最も力を注いでいる「アジア経済論2.0」について。後発国がとる工業化として、日本の経験が一つのヒントになっていると考えました。経済的後進性の優位、つまり、遅れて工業化を始めた国は、先発の国よりもいくつかの点で有利な点があります。例えばすでに開発された技術を導入して、それを利用することができます。ですが、後発性の利益を発揮するためには条件が必要で、数ある後発国の中でなぜ東アジアだけが発展を遂げたかという点、①政府レベル ②企業家レベル ③生産現場レベルで工業化のための社会的能力の形成が実現したということが挙げられます。

「アジア経済論3.0」では2.0の見直しを行いました。アーキテクチャ論のオープン化とモジュラー化が進むことによって、電子産業の場合は後発国の企業が先進国を越えることも可能になったのです。ここで強調しておきたいことは、これを実現しているのは「国」ではなく「企業レベル」のキャッチアップであるということです。単位が国から企業に移ったことに注目していただきたいと思います。

最後に、「アジア経済論4.0」について、実は私も今何が起きているのか十分わかりません。私がやってきたアジア経済論とは違うものが起き始めていると考えています。



第2部 パネルディスカッション



パネリスト 大泉 啓一郎
(株式会社日本総合研究所
調査部 調査部長 主任研究員)



コーディネーター 清水 一史
(九州大学大学院経済学研究院教授)

デジタル化が加速する中で 国家をどのように捉えればいいのか

大泉氏の「デジタル経済における国家の役割は」の問いに、末廣氏は「日本経済論をベースに考えると、制度・教育などの環境を整備した点では、国家は日本の産業発展に大きな役割を果たすと言える。しかし、産業発展は民間企業の努力、というのが共通の認識。日本には技術革新の特徴としてイノベーションを支える国家的枠組みがあり政府が一定程度貢献するが、国家の介入をどこまで許すのかは関わり方が変わってくる。また、メガ企業とマイナー企業に対して同じサポートを行うと反発が起き政府としての公平さを失うことに。つまり従来型の国のサポートは、直接であれ間接であれ難しいのではないかと考える。」と述べました。

ディスカッション終了後も末廣氏の考え方に高い興味を持つ多くの市民が、同氏へ熱心に質問するなど大変活発な時間となりました。

学校訪問

■ 実施日／9月21日(金) 11:00~12:20
■ 会場／福岡女子高等学校

講演は「私と地域研究 ジェンダーの観点から」をテーマに、アジア経済研究の歩みや女性の社会進出などについて、スライドを用いながら行われました。カースト制度や女性の社会進出についての変遷や問題だけでなく、それらの研究に多くの女性研究者が活躍し、現地で粘り強く時間をかけ、緻密な調査が行われていることも語られました。

続いての質疑応答では「どんな高校時代だったか」との問いに、当時は塾がなかったこともあり、特別熱心な受験生でなかったと回答。また海外での印象的な経験については、タイの路上生活者が屋台で自分が食べているものよりも良いものを食べているのを見て、彼らの遅しさや、文化の違いを感じたことなど、ご自身のエピソードを交えて語っていただきました。

その後、生徒から花束が贈呈され、生徒代表が「講演を通して物事の考え方や生き方について見直すことができ、今、頑張っていることに一生懸命取り組みたいと思いました」と挨拶しました。

